

教育やまなし

2006 (平成18年)

12

No.217

◎特集1 / 学びの意欲向上推進事業

◎特集2 / 四川省の教育事情 ～四川省教育交流事業に参加して～

- 食育の推進事業について
- 命の大切さを学ぶ体験活動
- 国語力育成推進事業の紹介
- 明日を拓く工業教育「甲府工業の取組」
- 地域教育力再生プラン ～地域で育つ地域の子ども～
- 県立博物館シンボル展 国宝・山水図三幅とオオカミ展
- らくがき …… 一宮南小学校 筒井加代子教諭
市川中学校 三井洋介教諭
- 県立美術館「バルセロナ35年の軌跡 山元正文の世界」
- 学校紹介 / 市川三郷町立大塚小学校・増穂商業高校
- 総合教育センター情報 / 特別支援教育部
- 新教育委員就任あいさつ
- 県立図書館 / 「図書館員の道具箱…テーマ別調べ方ガイド…」
- 山梨の文化財 / 県指定有形文化財 深山田遺跡青銅製銃十四口
- 主な行事予定



山梨県教育委員会

特集1

学びの意欲向上推進事業

義務教育課

県教育委員会では、平成十七年度より二か年計画で本事業に取り組んでいます。今回は各研究指定校での研究の成果を紹介します。

■甲府市立千塚小学校

本校では、学ぶことの意義を実感すれば、子供たちは学ぶ楽しさを手に入れ、学ぶ意欲が向上していくと考え、特に理科と音楽科の二教科について研究しました。学ぶ意義は学びによってよりよ



く変容したという満足感や、しっかりと学んだという達成感を感じ、子供自身が味わうことで実感できます。本校では「わかる授業」と「一人一人が学びの成果を実感できる自己評価」の二本立てで指導と評価の両面から学びの意欲の向上をねらい、研究を進めてきました。

理科では指導の工夫として、子供の既知の知識や考えを把握し、児童の実態に合った単元構成を工夫するなど指導計画の立案に力を入れました。音楽科では題材の構成を見直し、一時間のねらいが明確な授業づくりに取り組みました。評価の工

夫として理科では「学びのみちしるべ」、音楽科では「わくわくシート」という、学びの過程や終末において子供自身が学びの成果を実感できる評価シートを開発しました。これらの実践を重ねることで、両教科とも子供たちが生き生きと学ぶ姿が見られています。これからも継続して、学びの意欲について研究していきたいと思えます。

■甲州市立松里小学校



算数科と図画工作科において、主体的な学びをはぐくむ授業展開の工夫をすることで、子供たちの学びの意欲がさらに高まることを願って、研究を進めてきました。

算数科においては、学ぶことを意欲的に楽しめる活動とするために、「問題解決的な学習」を取り入れました。「自力解決」の場面で使用する「スマイルノート」は子供たちに様々な方法で問題を解決する喜びを与えています。

また、ふりかえりカードの中に見られた友だちの評価内容を子供たちに返すことで意欲的に学習を進めることができました。

図画工作科においては、図画工作科の四つの観点を子供たちに一目でわかるように、また、教師も意識するために表したものを「四つの力」とし、毎時間始めに掲示し意識化を図るようにしてきました。そのことで、「うまい」「下手」ではない評価がなされ、意欲へと繋がっています。

また、両教科の研究から教師の適切な言葉掛けが子供たちの意欲を大いに高める要因となることわかりました。

■上野原市立上野原小学校



「目標をもち、生き生きと学ぶ子供の育成」の研究テーマのもと、ねらいと評価を明確にした国語科・体育科の授業づくりを進めてきました。国語科では「読む」領域に焦点をあて、物語文の叙述内容に即して、確かに読むことと豊かに読むことを大切にしてきました。手立てとしては、スキルカード（自己評価・教師評価の入った学習カード）を活用して学ぶ内容をはつきりさせ、目標を設定した上で授業を行いました。また、朝の十分間読書を通し

て本に親しむ態度も養ってきました。体育科では、「器械運動」領域に焦点をあて、「精一杯」「できる」「つどう」「わかる」の四つの楽しさを取り入れた授業を行いました。学習

● 特集1：学びの意欲向上推進事業 ●

カードや場づくり、子供同士のかかわり合いなどを通して何を学習するかが明確なねらいのある授業を行いました。また、低学年からの基礎感覚づくりに取り組みました。

「両教科とも「わかった」「できた」を実感することや自己評価、他者評価、教師の評価を適切に行ってきたことにより子供たちの意欲が高まってきたのを感じています。

■ 笛吹市立一宮中学校



「学びの意欲向上」に向けて、授業づくりと集団（学級集団・学習集団）づくりをからめながら、主体的に活動する生徒の育成を目指し研究を推進してきました。この研究では、学習の見直し（シラバスによるガイダンス）をもたせて授業に臨むことで目標をもつて活動できるようになりました。また、「わかった」「できた」という経験を

させ、学びの成果が実感できる評価（教師評価・自己評価・相互評価）を工夫したことにより、自己認識や自己理解をする力がついてきて、自分の力を伸ばそうとする姿勢を高めることができました。さらに、発表の場面を取り入れた授業を全教科で同じように取り組んだことにより、生徒が抵抗なく自分の考えを発表することができ、仲間の良さに気付き、認め合い、励まし合い、教え合う場面が増えました。全職員が一丸となり生徒一人一人を生かしていけるように取り組んできたこと

で、生徒たちが生き生きと、伸び伸びと活動を進めることができるようになりました。

■ 北杜市立高根中学校

「生徒の学びの意欲の向上を図る学習指導と評価の手だてを明らかにすること」を目標に、指定教科の英語科と美術科を中心としながら、全教科で研究を行っています。二年間で全教師による授業公開を行い、実践を通して手だてを提案し検討してきました。授業の工夫では、地域とのかかわりを生かした授業など、教科の特性を生かした様々な工夫が提案されました。評価の工夫では、指導と評価の一体化



の一つの手法として、「ポジティブな評価」に注目して取り組んでいます。「生徒のための評価」「次の学びに結びつく評価」を目指し、学びのプロセスにおいて積極的に生徒の「よい点や進歩の状況」を評価しようと

取り組んでいます。この研究を通して、例えば、自ら発言する生徒が増えていく、友だちのアイデアを取り入れて一層工夫しようとする取り組みが見られるなど、教師の実感として、意欲の向上した姿がとらえられるようになっていきます。今後も、全校が一丸となり、さらに指導と評価の手だてを明らかにすることに努めていきたいと思います。

■ 中学校組合立河口湖南中学校

全体の取組として、集団づくり、集団の力を高

めることに目を向けました。学級の雰囲気や普段の人間関係によって、授業での意欲や活動に違いが生じるからです。



「QUアンケート」（学級集団理解のための心理テスト）を活用し、問題点にも対応しました。

授業では、役割と目的のあるグループ活動を仕組み、認め合いや有得感を得ることを大切にしました。評価については、「目標の提示」の徹底や

自己反省カードの活用を全教科で行いました。生徒自身にとって、より具体的な反省と次へのステップという、意味のあるものとなっています。

国語科では特に授業形態の有効性を、保健体育科では「身につけさせたい力（ミニマム）」を意識した授業づくり、についてそれぞれ研究を深めてきました。

先日の公開研究会で多くの方々へ内容を伝え、自分たちもさらに学ぶことができました。今後は最終的なまとめに向けて、成果と課題を整理していきたいと思っています。

今秋公開された各研究指定校の実践を紹介しました。それぞれ大きな成果をあげています。これらの成果がそれぞれの地域で共有され、子供たちの学びの意欲が高まっていくことを思います。残る指定校四校については、三月号で紹介いたします。

特集2

四川省の教育事情

四川省教育交流事業に参加して

高校教育課

四川省教育交流事業として、平成八年度から、本県と四川省の教育友好訪問団が一週間にわたって双方を訪問し、教育視察や情報交換を通して相互理解と友好親善を図っている。本年度は、教育次長を団長として、教育関係者五名が七日間（十月二十二日～十月二十八日）にわたり、訪中した。

■中国（四川省）の教育事情

中国の教育体系は、基本的には日本と同じであるが、学年の始まりが九月なので、日本より七ヶ月早い就学となっている。

四川省における各種類の就学（進学）率は小学校99%、初級中学（日本の中学にあたる）88%、高級中学（日本の高校にあたる）50%、大学21%である。中国の全体的な傾向だが、都心部と農村部の格差が大きく、高級中学進学率も成都市（四川省の首都）では98%である。義務教育は就学率が低い農村部では無償だが、都市部では一部保護者負担としている。日本のような給食制度はなく、児童生徒は一度自宅に戻るか学校に留まって昼食を摂っている。

初級中学は義務教育なので基本的に選抜試験はないが、高級中学への入学に際しては、省・自治区・直轄市で実施される統一入試によって選抜される。大学の入学者は毎年七月に実施される全国統

一入試によって選抜する。

■教育機関の訪問

大学一校、高級中学校三校、小学校一校、幼稚園一校を訪問させていただいた。訪問先で共通していたことは概ね次の点である。

・日本に比べ一校あたりの生徒数が多く、高級中学及び幼稚園で寄宿制をとっている。

・中国の学力社会を認めつつも、学力一辺倒の教育を避け、全人教育や職業教育を実践する中、生徒の様々な才能を見出し、その育成にも力を入れている。

・実績を上げている生徒や教員に対して、その内容や顔写真を校内に掲示し、奨励している。

◆石室中学*高級中学部に訪問

紀元前一四一年に文翁によって創設された、生徒数二千六百人、教員数二百六十人の中国で一番歴史の古い中学である。四川省トップの学力を誇り、著名人を多く輩出している。今年五月に訪日した三人の生徒が日本での体験を語ってくれたり、他の生徒による書道作品のプレゼントや洋琴の演奏があった。授業の合間に全校生徒による体操の時間があり、その様子を見ることができた。

◆四川大学

一九九四年に三つの重点国立大学であった四川大学、成都科技大学、華西医科大学が統合され、現在の四川大学が創設された。三十以上の学部を設け、職員数一万二千人、学部生徒数三万人、大学院生数一万人、留学生数六百五十人の規模である。現在、三十ヶ国以上の百有余に及ぶ海外の大学や研究所と学術交流を行っている。三百六十五万冊の蔵書数は中国随一を誇っている。



本県から派遣している望月孝志教諭が教鞭を執っている大学院生の授業を参観する。その後、学生との交流会に参加し、文学、いじめ問題、学生アルバイト等について、意見を求められた。日本に関心が高く、意欲的な学生ばかりであった。



◆成都師範大学附属銀都小学校

企業がバックアップしている私立の小学校で創立六年目になる。生徒数は千人、教員数は開校当初十七名から現在百二十五名と急成長している。優秀な教員集団の中には、国から認められた特級教師もいて、校内にはプロマイドのような先生方全員の顔写真が掲示されていた。小学校一年生から英語を取り入れるなど、徹底した英才教育をしている。子供たちや先生方がプロ顔負けの歓迎の

ダンスや歌を披露してくれたことや、各クラスの入口に担任のオリジナルのクラス紹介が掲示されていたのが印象的だった。



◆綿陽市立綿陽中学*高級中学部に訪問

国家レベルのモデル中学で中国上位百校に入る。在校生九千五百人、教員五百人、特級教師十二名、高級教師百五十名の構成で、ほとんどの生徒が敷地内にある寮で生活している。進学対策だけでなく、生徒の様々な才能を育成するための環境づくりや対外交流にも力を入れている。その他、園児の創造力を重視した教育を行っている市級机咲第三幼稚園や峨眉山市立峨眉二中学（高級中学部）にも訪問させていただいた。

綿陽中学日課表

绵阳中学作息時間			
6:30	起床	2:33	预备
6:40	早操（朝の体操）	2:35 —	3:20 第五节课
7:00	早餐（朝食）	3:28	预备
7:25	预备（予鈴）	3:30 —	4:15 第六节课
7:30 —	8:00 早课（早朝課外）	4:15 —	4:20 眼保健操（目の体操）
8:10 —	8:55 第一节课（第1時限）	4:28	预备
9:03	预备	4:30 —	5:15 第七节课
9:05 —	9:50 第二节课	5:23	预备
9:50 —	10:15 课间操（体操）	5:25 —	6:10 第八节课
10:18	预备		
10:20 —	11:05 第三节课		
11:13	预备		
11:15 —	12:00 第四节课		
12:00 —	12:40 午餐（昼食）		
12:40 —	2:15 午休（昼休み）		

政治学习及晚餐時間見下表 （政治学習及び夕食時間表）		
年級	政治学习	晚餐
高一、高二	6:15—6:30	6:30—7:20
高三	7:05—7:20	6:10—7:00

食育の推進事業について

スポーツ健康課

「食」は、私たちが生きていくためには、かかせないものであり、食は命の源です。健康な生活を送るには、健全な食生活はかせません。特に成長期にある児童生徒にとっては、生涯の食習慣の形成にも影響があります。

しかし、近年食の大切さが希薄になり、子どもたちの朝食欠食や栄養バランスの偏り、肥満傾向の増加など、食を取り巻く様々な課題が生じております。

平成十七年七月に施行された食育基本法において、「食育」は生きる上での基本であり、知育、徳育及び体育の基礎となるべきものと位置づけられるとともに、様々な経験を通じて「食」に関する知識と「食」を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てる食育の推進が示されました。

また、平成十八年三月には、食育推進基本計画が策定され、学校における食育推進について、次の施策に取り組みよう求めています。

- (一) 食に関する指導体制の充実
- (二) 子どもへの食に関する指導内容の充実
- (三) 学校給食の充実

こうした中で、県教育委員会では、児童生徒が

「食」に関する自己管理能力を身につけ、生涯にわたって健全な食生活が実践できるようにするための様々な取組をしています。

まず、今年度は、「学校における食育の推進事業」を立ち上げ、学校における食育の基本方針や具体的な指導内容の検討・策定を行うとともにこれらをまとめた指導計画書や周知のためのパンフレットの作成・配布等を実施します。

さらに、学校における食育を充実するためには、給食の時間をはじめ学級活動、各教科、総合的な学習の時間など、学校教育活動全体の中で、食に関する指導に取り組みが必要であり、各学校における食育の全体計画の作成やこれを推進するための栄養教諭の配置等について検討を進めております。

また、十月下旬には、県立文学館において「学校における食育」をテーマとしたシンポジウムを開催し、女子栄養大学の香川芳子学長の基調講演や教育関係者、保護者、生産者、学校栄養職員の代表の方に参加いただき、それぞれの立場から現状や課題等について意見交換を行うなど、食育についての理解を深めたところであります。

やまなしの未来を担う子どもたちの健康の保持増進のため、学校が中心となり、家庭や地域の連携・協力を得ながら、学校における食育を積極的に推進して参ります。



● 命の大切さを学ぶ体験活動 ●

命の大切さを学ぶ体験活動

北新小学校

本校は、平成十七・十八年度と文部科学省より「命の大切さを学ぶ体験活動推進事業」の推進校として指定されました。

四年生の「総合的な学習の時間」を中心にして「命の大切さを学ぶ」効果的な体験活動の内容・指導方法・評価方法等について次のような事例を通して研究を進めてきました。

《体験活動事例1》 相川探検をしよう

ここでは、自然に思いつきりつかり、生き物と接することで生命とふれ合うことの・楽しさ・喜び・悲しみ・後悔・愛おしさを感じる体験ができることをねらいとしました。



子供たちは、学校近くの相川で水辺の生き物とふれ合いました。また、教室では長期間の飼育も体験しました。えさを食べる、交尾する、死んでしまうといったできごとから生き物を間近に見る喜びや楽しみを味わうだけでなく、飼育の大変さや責任の重さを感じてきました。

特に、生き物の死との遭遇から死の不可逆性を実感し、次には元気に生活できる環境を整えてやることで、死んでしまった命や今ある命を大切にしようとする気持ちをあらわしていました。

《体験活動事例2》 二分の一人式をしよう

ここでは、①「高齢者とのふれあい花作り」②「福祉プラザの見学」③「高齢者体験・車いす・アイマスク体験」④「障害のある方との交流」⑤「特別養護老人ホームでの交流・介護体験」など高齢者と障害をもつ方との交流を通して一生懸命「生きる」ことの素晴らしさ、大変さなどを体験し共感することをねらいとしました。

この中の④の体験では、障害のために足を手の代わりに使って生活し、画家として絵を描き続けてきた桜本さんと交流し、桜本さんの明るく前向きな生き方に、素直に驚き、感動するとともに、



尊敬の念をいただきました。

事例2のまとめとして、最後に保護者と二分の一人式を行います。これまでの成長を振り返り、愛情あふれる中で見守られてきたことに感謝し、これからの「生き方」を考えるきっかけとします。

体験活動の評価として、評価規準表を作成し、教師側の指導意図と、子供自身の振り返りカードやウエビング（意見感想で関係あるもの線で結びながらクモの巣状に表記する手法）を活用しての評価が一致するように考えるとともに、更によりよい方法についても模索していきます。

国語力育成推進事業の紹介

— 高校教育課 —

1 概略

この事業では、平成十六年から生徒の国語力育成のための指導事例集を作成してきました。平成十六年度は、「読むこと・書くこと」と図書館を利用した授業の指導事例集と、平成十七年度は「話すこと・聞くこと」の指導事例集を作成しました。本年度は、甲府西・甲府城西・吉田の三校を研究指定校として、指導事例の効果等について検証を行っています。

2 国語力とは

国語力という言葉のとらえ方は、人により、一様ではありません。読み書きの力や、豊富な語彙力、あるいは我が国の伝統的な文化を踏まえて闊達な話ができることなどを意味します。

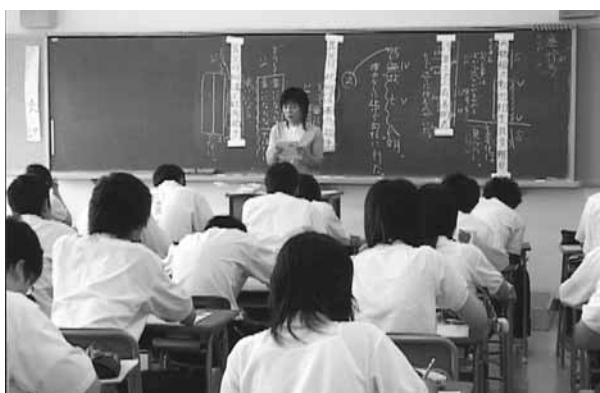
この国語力育成事業では、国語力を「相手の話を正しく聞き取り（文章を正確に読み取り）、状況を正確に把握した上で、言語を用いて論理的・客観的に思考し、第三者にわかるように適切に話し、書く能力」と定義し、学校教育全体で「国語力」育成を目指しています。

つまり日常の全ての教科学習や、課題の探究、さらには現実の社会生

活の場面で、有効に使いこなせる能力を育成することに主眼があります。

3 研究指定校の中間報告から

甲府西高校では、「新たに得た知識を自分の体験に基づいて評価・批評することまでを、目標とすべきだった」「今回の研究を通じ、学んだ知識や技能を進路実現の道具とするのではなく、真に生きる道具にする授業の端緒が見えてきた気がする。」と概括しています。



甲府西高校

甲府城西高校では、「今後の課題として国語科以外の教科の『国語力』について、考えていく必要がある。」と、新たな課題を設定しています。



甲府城西高校

吉田高校では、生徒がインターネットやプレゼンテーションソフトを使いこなし、上手に発表する反面「声を出す練習、またその機会を多く設ける必要性を感じ、発表での元気さを高校生レベルで実現させること」を、新たな課題としています。

4 まとめ

中間報告からは、各学校で「国語力」を生徒の生きる力に結び付けるための具体的な工夫や取組が、浮かび上がってきています。

国語力向上は、山梨県の長期総合計画「創・甲斐プラン21」の「確かな学力の向上と個性を生かす教育の充実」において、重要な施策として位置付けられています。

今後はさらに各高等学校で、それぞれの生徒の実態に合った「国語力」向上の取組を進めていくこととなっています。



吉田高校

明日を拓く工業教育「甲府工業の取組」

— 高校教育課 —

本校は「技術者となる前に人間となれ」を信条に、地域産業を支える技術者の育成を目指す工業教育を実践し、創立以来二万五千名以上の卒業生が経済界・産業界で活躍しています。特に基礎・基本を身につけたものづくり教育や資格取得に力を入れ、さらに生徒の興味・関心を引き出すことにより、進路希望に応じた高度な技術・技能を習得する教育を推進しています。本校が取り組んでいる工業教育の内容を紹介します。

「難易度の高い資格取得への取組」

産業界では、資格を持った人材を必要としています。そのため生徒たちは多くの資格取得にチャレンジしています。資格取得に取り組むことにより、学習に目標ができ、専門職としての知識と技能が身に付きます。また最後まであきらめずに頑張ることで合格した達成感だけでなく自信も身に付きます。さらに専門的な技術を研究するため、国立大学を含め進学を目指す生徒が多くいます。

各科では組織的かつ計画的に高度な資格取得へ対応した課外を実施しています。その結果、大学生や社会人が取得を目指す高度な資格である第一種電気工事士では、二十九名が合格し、合格者数では全国の工業高校でベストテンに入りました。また土木施工技術者試験へも力を入れており、合格率においては、全国平均を大きく上回る七十%以上の合格率を誇っています。その他に、デジタル通信関係の資格や住環境に関わる資格など、実社会で即必要とされる高度な資格にチャレンジし

ています。

「ものづくりを基本とした取組」

実習等の体験的な授業では、企業の第一線で活躍している高度熟練技能士を講師に迎え、ものづくりの基本を身に付けます。さらに興味のある生徒は、放課後に指導を受け技術を磨き、技能士の資格にチャレンジします。

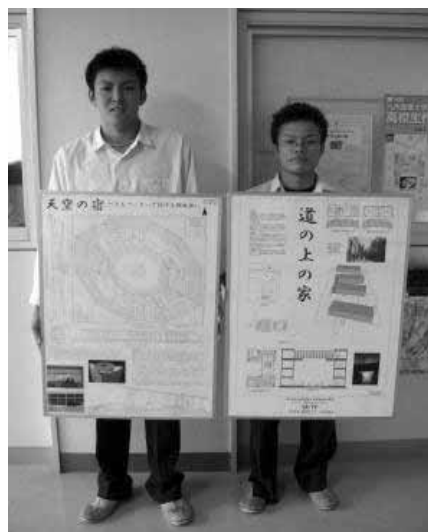
高度なものづくりへの取組としては、山梨県立大学や神奈川工科大学および韓国の工業高校との技術交流を行い、ネットワークを利用した定点観測システムや遠隔制御システムの研究を行っています。また大学と協働でサッカロボットの研究や飛行船の自立飛行の研究なども行っており、これらの研究成果は学会誌などへ紹介されています。

大学や各種団体等で行っている設計競技（コンペ）へも多くの作品を出展し、入選者数では全国の工業高校でトップになりました。また近隣の小学校でボランティア測量を行い作成した平面図を寄贈したり、生徒が主体になりコンピュータの講習会を開催するなど、日頃の学習の成果を、地域に還元する活動も積極的に行っています。

本校はこのような取組を基礎として、生徒の自己実現をサポートし、生徒や社会のニーズへ対応できる教育課程を研究しています。



高大連携



設計コンペ

地域教育力再生プラン

地域で育つ地域の子ども

社会教育課

今、子どもたちの安全・安心な遊び場の不足や青少年の奉仕・体験活動の不足等が指摘されています。

子どもは地域で育つ、社会の宝です。地域の大人たちが協力して、地域に根ざした多様な体験活動や交流活動等の機会を提供し、社会全体で子どもを育む環境づくりに取り組む必要があります。

社会教育課では、平成十七年度より国委託事業として「地域教育力再生プラン」を実施しています。具体的には、次に掲げる事業です。

まず、「地域子ども教室推進事業」は、地域の大人の教育力を結集して、子どもたちが放課後や週末に、様々な体験活動や地域住民との交流活動等を行う「子どもの居場所づくり」事業です。本年度、十七市町村で七十二の教室を開設しています。内容としては、絵手紙、合唱、囲碁・将棋、料理、英会話、サッカー、カヌー、軽スポーツ、昔の遊び、伝統芸能継承、パソコン操作の学習などです。



わら細工教室

次に、「地域ボランティア活動推進事業」は、お互いに支え合う地域社会の実現を目指し、子どもから大人までがボランティア活動を体験するもので、現在、九市町村の十三実行委員会では、県内では、児童の登下校時の防犯パトロール、道路清掃や花植えなどの環境美化ボランティア、本の読み聞かせボランティア等があり、参加する人自身の自己実現も図られる活動となっています。



花植えボランティア

実施した市町村、民間団体、個人へのアンケートでは、これらの事業により、次のような変化がみられたという回答が多数寄せられました。

【地域子ども教室】

- ・子どもが異年齢で遊ぶことが増えた。
- ・子どもが自分から進んで活動するようになった。
- ・子どもの創意工夫がみられるようになった。

【地域ボランティア活動】

- ・人や地域のために役立つ活動ができた。
- ・地域の人と子どものかかわりが増えた。
- ・その他に、今年度は、小学校低学年の子どもたちを、高学年の子どもたちや保護者と一緒に下校させるため、学校の余裕教室等に安全・安心な活動場所を設置する「子ども待機スペース交流活動推進事業」を二つの小学校で行っています。

今後、この「地域教育力再生プラン」の趣旨が各種事業に生かされるよう支援するとともに、「地域子ども教室推進事業」などの活動やマニュアルを生かせる「放課後子ども教室推進事業」（放課後子どもプラン）を来年度からスタートさせる予定です。

※事業に関するお問い合わせ先
社会教育課青少年教育担当

（電話）〇五五―二三三―一七七四

国宝・山水図三幅とオオカミ展

—山梨を代表する資料・シンボル展 今冬の見どころ—

—県立博物館—

県立博物館ではこの冬、二つのシンボル展が開催されます。どちらもなかなか見ることのできない資料が並びます。是非ご来館ください。

国宝夏・秋・冬景山水図室町將軍のたからもの

(一月二日～一月二八日)

お正月には、国宝「夏景山水図」が展示されます。夏景山水図は、身延山久遠寺に伝わる水墨画です。江戸時代に、掛川（現在の静岡県）の太田資宗という人物から久遠寺に寄進されたもので、もともとは中国で描かれたものです。日本にもたらされたからは室町三代將軍足利義満の所蔵となりました。代々足利將軍家に伝わる名品として、「將軍家蔵品目録『御物御画目録』」にも、「四幅山水徽宗皇帝」と記されています。



国宝・夏景山水図

「四幅」とはどういうことでしょうか。実は、この絵は、もともと「四季山水図」として、春夏秋冬の四幅で一組のものだったといわれています。残念なことに、春の情景を描いた春景図は失われ、

現存するのは、ほかに二幅「秋景山水図」「冬景山水図」のみ。それぞれ国宝に指定され、京都の金地院所蔵となっています。

今回の展示では、今に伝わるその三幅が一堂に集います。三幅が揃って展示されることは、非常に稀なことになります。いずれも水墨で描かれた幽遠な世界に見る者を引き込む魅力をたたえ、画中に響いているであろう音でさえも感じさせると言われる、名品中の名品です。今年のお正月は、室町文化の粋を、県立博物館でぜひご堪能ください。

オオカミがいた山

(二月六日～三月一八日)

二ホンオオカミは明治三八年(1905)以来生存が確認されておらず、謎が多い生物です。

現在、県立博物館には笛吹市御坂町のお宅に伝わってきた二ホンオオカミ頭骨が寄託されています。本展ではこの資料を基点に、二ホンオオカミとはどのような生物であったのか、また人とオオカミの関係はどのようなものであったのかを紐解いていきます。

二ホンオオカミとはどのような生物だったのか。その姿を知ることができるのが今に伝わる剥製です。国内にはわずか三点しか残っていませんが、今回は東京大学と和歌山大学所蔵標本の二点を展



笛吹市御坂町に伝わる二ホンオオカミ図鑑

示します。剥製の数は限られていますが、実は頭骨標本に限ると各地の遺跡出土標本や民家に伝わるものが多い数残されています。これらは二ホンオオカミの大きさや大陸のオオカミとの関係を探る貴重な資料であり、本展では多数

の標本を集めて展示します。

民家に伝わる資料は憑き物落としや魔除けとして使われてきたもので、人とオオカミの関わりを伝える資料でもあります。江戸時代には秩父・三峯神社などでオオカミの御札が配られ、鹿猪などの害獣除け、火災除け、盗難除けなどに効果があるという信仰が広まりました。オオカミ信仰関係資料をもとに、人とオオカミの関わりを探るのが展示のもう一つの柱です。

御坂町のオオカミはなぜ現在に伝わったのでしょうか。本展はその謎解きにもなっています。二ホンオオカミの謎を探る旅に是非ご参加下さい。

らくがき



「生きているということ」
三井 洋介

このところ、いじめを苦しめた自殺のニュースが相次いでいて、深刻な社会問題となっている。この問題は、どんな子どもにも起こりえる問題であり、我々は子どもたちのサインを見逃さず、些細なことでも一つ一つ丁寧に対処し、子どもたちとより良い人間関係を構築し、接していく必要がある。そして一人一人の命を大切にしていきたい。

谷川俊太郎が書いた詩に『生きる』という題名の詩がある。五連から成り立ち各連の内容は『生きているということ』について、具体的な身近なごく当たり前のことがたくさん挙げられている。

私は『生きているということ』と聞かれれば、「心臓が動いていること。息をしていること」などと答えてしまうが、谷川俊太郎は何気ない生活の一コマの事例を次々に挙げていく。たくさんの『生きていること』に触れ「そうか。これもそうか。あれもそうか。」と納得させられる。『生きているということ』の意味を改めて考えさせられるきっかけを与えてくれる。

『生きているということ』を中学生はどう感じるのか。「優しくされること」「体や心の痛みを感じること」「みんなと一緒にいること」「人に感謝する(される)こと」「みんなと笑っていること」「感動すること」「恋をすること」「喜怒哀楽を感じること」「ケンカをすること」「みんなと涙を流すこと」「幸せだと感じること」「友達と話すということ」「誕生日をみんなで祝ってくれること」など、たくさんの生きていることを感じている。そんな一人一人の『生きる』思いを大切に夢や感動を与え、『生きていること』を実感しながら、目の前にいる生徒と共に残り少ない中学校生活を送っていきたい。そんな思いを胸に12月8日、谷川俊太郎の『生きる』を今年のクラス合唱で歌う。

(市川中学校)



「大切なこと」
筒井 加代子

2年前、初めて高学年を担当することになった私は、不安でいっぱいだった。それは子どもたちも一緒に、5年生になって初めて書いた作文に「担任の先生が筒井先生でうれしいのか悲しいのかわからない」とあったのには、苦笑いしつつ、納得。

不安でいっぱいのスタートだったけれど、子どもたちの優しさ、素直さに支えられ、感動的な2年間を過ごすことができました。今年3月卒業式を迎えるまでの日々の中で、こらえてもこらえても涙が止まらなくなったことが何度となくあった。

誕生日のこと。教室に入ると…。黒板に「41才おめでとう！」の大きな文字と折り返しコーン(人生の折り返しをイメージしていたことには笑!)の絵が。メッセージに続いての「旅立ちの日」の合唱には「みんな泣かそうと思ってるやだなあ。」と言いつつ、目からは涙があふれて、あふれて…。(「先生が泣いた、とガッツポーズで帰ってきたんですよ。去年は泣かなかった、とくやしがついてたんですよ。」という話をお母さんから聞いた時には、笑ってしまったが、いい子たちだなあ、と改めて実感)

私は、何かをする時に戸惑ったり、悩んだりしたら「ほんとに大切なこと、大事にしなくちゃいけないことは何だろう」と立ち止まって考えるようにしている。いろんな先生方と接する中、「すてきな」と思う先生は、“大切なこと”を見失わない先生だった。“大切なこと”の物差しは、人それぞれ違うと思うが…。

2年間この子たちと過ごす中で、“大切なこと”として優先してきたことは「こんないい子たちを裏切っちゃいけない」ということだった。

いろいろなことに流されて、“大切なこと”を見失ってしまうこともあるけれど、いつも“ほんとに大切なこととは”と自問自答していきたいと思う。

(一宮南小学校)

山梨県立美術館

バルセロナ35年の軌跡 山本正文の世界
平成19年1月20日(土)〜2月25日(日)

山本正文(1947年山梨県生まれ)は、千葉工業大学建築学科卒業後、パリを経てスペインのバルセロナに渡ります。ミロやピカソ、ガウディを輩出した芸術都市バルセロナに魅了された山本は、以降その地で35年に及ぶ創作活動を続けています。

バルセロナの応用美術学校で版画を学んだ後、山本は1979年版画工房を立ち上げます。工房には、山本の版画制作技術に厚い信頼を寄せる現代カタルニア美術の巨匠たちが集まり、山本にアドバイスを求めたり、制作を依頼したりしました。このような芸術家たちとの制作交流によって、山本自身、作家として成熟していきます。1980年代後半からは、版画以外に彫刻の制作にも力を注ぎ、また国際的に著名な詩人とともに詩画集を数多く出版するなど、制作の領域を広げています。

山本の作品は、日本的な感性を基調にした繊細さ、美しい色彩を特徴とし、近年ヨーロッパや中米において評価が高まりつつあります。本展は、代表作およそ300点によって山本芸術の全容を紹介しようとする、日本における初の大規模な回顧展です。

会期中作家によるギャラリー・トークと講演会があります。詳細は次のとおりです。

○ギャラリー・トーク

日時 1月20日(土) 午後2:00〜

場所 特別展示室(申し込み不要、本展チケットが必要)

○講演会「バルセロナ35年の軌跡」

35年におよぶバルセロナでの制作活動の日々を、さまざまなエピソードを交えて語ります。

日時 1月28日(日) 午後2時30分〜

会場 総合実習室(申し込み不要、聴講無料)



山本正文《葡萄畑 I》
1993年 銅版 作家蔵

継続は力なり ～25年続けた業間活動～

市川三郷町立大塚小学校

本校では、昭和56年度より「体力づくり」の取組を始め、今年度で25年が経ちました。現在、業間活動で行っている内容は体育的活動と読書活動ですが、長く続く本校の伝統的な活動です。業間活動を6年間続けることで、主体的な態度や民主的な人間関係を培い、豊かな感性やスポーツ・読書を楽しむ心などを育てます。

体育的活動として「一輪車乗り」「なわとび運動」「5分間走」などを取り入れています。一輪車は、全校児童に一人一台あり、休み時間や放課後、多くの児童が乗り回し利用しています。縦割り班ごとに上級生が下級生を指導し、入学当初はうまく一輪車に乗れない

児童も日々の努力で乗れるようになり、さらに、いろいろな技を獲得していきます。練習に目標をもたせるためにチャレンジ週間を設け、技能向上を図るとともに達成感を味わわせています。運動会では、アトラクションとして一輪車乗りを地域の人たちにも披露しています。なわとび運動や5分間走は、学年ごとや縦割り班ごとに取り組み、技能や体力の向上に成果があらわれています。

どの活動も長く続けることで子どもたちの自信となり大きな力となっています。まさに、「継続は力なり」です。



なわとび運動



一輪車乗り

「増穂町商店街店舗ホームページ作成サービス」

増穂商業高校

本校情報処理科の2年生は、増穂町商店街各店舗の特徴や取扱商品などを紹介するホームページを作成して、インターネットに公開しています。

今年で3年目になるこの事業は、地域に貢献する商業高校を目指してはじめられました。

商店街の活性化に寄与することを最大の目的としていますが、生徒にとっては商店経営（商業）を体験的に学ぶ大変よい機会となっており、商店訪問の際のマナーや電話の応対等も含めて、総合的に学習させていただいています。

本年も5月12日に、生徒が各商店を訪問して取材活動を行いました。期待と不安の中取材を終了した

生徒たちは、『緊張して上手く話すことができなくて困ったが、商店の人が優しく対応してくれた』、『商売のことを聞くことができ勉強になった』といったような感想を述べています。

生徒が作成したホームページは、下記アドレスで公開されていますので、ぜひご覧ください。

(<http://www.5f.biglobe.ne.jp/~masuhosyoutengai/>)

または増穂商業高等学校ホームページ

(<http://www.kai.ed.jp/masuhochs/>)から見ることもできます)



特殊教育から特別支援教育への移行に向けて

山梨県総合教育センター 特別支援教育部

■学校教育法等の一部改正

児童生徒等の障害の重複化に対応した適切な教育を行うため、現在の盲・聾・養護学校から障害種別を超えた特別支援学校とするなど学校教育法等の一部を改正する法律が平成十八年六月に成立し、平成十九年四月一日から施行されることになりました。

学校教育法の一部改正の概要

- ・盲学校、聾学校、養護学校を障害種別を超えた特別支援学校に一本化。
- ・特別支援学校においては、在籍児童等の教育を行うほか、小中学校等に在籍する障害のある児童生徒等の教育について助言・援助に努める旨を規定。
- ・小中学校等においては、学習障害(LD)・注意欠陥多動性障害(ADHD)等を含む障害のある児童生徒等に対して適切な教育を行うことを規定。

■特別支援教育部の支援

研究、研修、教育相談、情報の収集及び啓発、「特別支援教育体制推進事業」等の業務を通して特別支援教育推進の支援を行っています。また、要請による学校訪問も行っています。

一 学校、教職員への支援

- ①校内研修会等(校内支援体制の構築、個別の指導計画・教育支援計画の作成、LD・ADHD・高機能自閉症等の指導法)

②調査研究による情報提供

「校内委員会」「特別支援教育コーディネーターの役割とその機能」「学校外の関係機関との連携」について研究成果を研究紀要、ホームページに掲載

③研修会の開催

管理職等悉皆、LD等の理解や指導、特別支援教育コーディネーター養成、障害児の心のケア等十四研修

④特別支援教育体制推進事業

巡回相談チーム等による巡回相談

二 本人、保護者への支援

教育相談(来所、電話、訪問、医療機関や他の相談機関の紹介等)、知能検査等の実施

三 市町村等教育委員会との連携・県民への支援

県内九地区十四会場・心身障害児巡回教育相談(就学等)の企画・実施、教育相談における所見の発行

四 他の関係機関等と連携した支援

■来年度の特別支援教育コーディネーター養成に向けて

本センターでは、各地域で校内支援体制の中心的な役割を担っていただくためのコーディネーターを平成十六年度三十二人、平成十七年度から十九年度までの三年間で約三百人を養成する計画で研修を行ってきました。来年度は受講対象を高等学校まで拡大し基礎研修とステップアップ研修を企画しています。

コーディネーターの役割や具体的な支援の

方法を習得し、校内支援体制の整備・充実が図られ、児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じた支援が行われることを期待しています。

■相談受付

電話 〇五五・二六三・四六〇六
相談日 毎週月～金曜日(除く祝祭日)
相談時間 午前九時～午後五時

■特別支援教育に関する情報の提供

特別支援教育部ホームページ
<http://www.ypec.ed.jp/center/tokusyu/top.htm>



(研修風景)

新委員に

須田清氏が就任

県教育委員会では、曾根修一教育委員の任期満了に伴い、後任の教育委員として須田清氏が知事から任命されました。新委員の任期は平成十八年十月十三日から平成二十二年十月十二日までです。

教育の目的は「人づくり」に他なりません。そしてその実現は単に学校だけでなく、家庭や地域社会との教育作用がバランスよく昨日してこそ結実するものと思います。

しかし昨今の現実には国政段階での教育の在り方が揺れる中、本県でも教育関係者の懸命な努力にもかかわらず、子ども達の問題発生が後を絶ちません。目を転ずれば子育てに悩む親、子ども達の多様化に苦しむ教師、我が子本意の地域社会など、事態は実に深刻です。



委員
須田清

「人間は教育によって人となる」と言われています。今こそ家庭・学校・地域社会はその在り方と責任を再確認し、行動を起こす時ではないかと考えます。その中で特に保護者・子ども・教師の信頼に基づく学校教育の充実が真に問われていると思います。

私は委員就任に当たり、教育の不易を大切にしつつ、本県の教育風土に学び、本県の特徴を生かした教育の推進向上に努力してまいりたいと考えています。

『図書館員の道具箱…テーマ別調べ方ガイド…』

山梨県立図書館

言葉の語源や由来を探ることは、単に語義を知ることだけではなく、その裏にある歴史を知ることにもなります。今回は、「食」に関連した語源や由来を調べるための図書をご紹介します。

- ◆まずは、日本語、民俗学、食品・料理コーナーの辞典で調べてみましょう！

『日本語源大辞典』（小学館 2005）〈813.6-二ホ〉

日本最大・最詳の6000語を収録。「語源説」欄には、今までの諸説が紹介され、「参考」欄には、どの説が有力かなどの補足説明もあり、言葉の歴史をより深く味わえます。巻末には語源説の出典として示した文献約850点の解説もあります。

『日本料理事物起源』（川上行蔵著 岩波書店 2006）〈383.8-カフ〉

江戸時代の料理書を通読し、そこに描かれている食べ物の記録をまとめた一冊です。「山の幸」「海の幸」「料理法、調味品」「加工物」に四大別し、分類整理、編集されています。

『世界の食語源×由来小事典』（ジャパンアート社 2001）〈596.0-セカ〉

語源と由来のみを集めた事典です。巻末には、「食物年表」があり、食の歴史を味わえる一冊です。

『西洋たべもの語源辞典』（内林政夫著 東京堂出版 2004）〈383.8-ウチ〉

314項目の西洋の食品、料理の語源、歴史、語形の変化がわかります。

☕ 「フォウグラ」が「イチジク」って？ 答えはこの図書の中にあります。

- ◆次に食文化などの図書を調べてみましょう！

『日本食物文化の起源』（安達巖著 自由国民社 1981）〈383.8-アダ〉

『世界食物百科』（マグロンヌ・トゥーサン＝サマ著 原書房 1998）〈383.8-トウ〉

『日本の食文化大系』全21巻（東京書房社 1983）〈383.8-二ホ〉

☕ 「鯨」は「子の代わり」？ 続きは6巻の「魚貝譜」をご覧ください。

※県立図書館にはここで紹介した以外にも役立つ資料がありますので、ぜひ御利用ください。



山梨の文化財

県指定有形文化財（考古資料）

みやまだいせきせいとうせいわん
深山田遺跡青銅製鏡十四口（北杜市）

（平成十八年四月二十七日指定）

本資料は、平成十年に北杜市（旧明野村）教育委員会により、県営圃場整備事業に伴う発掘調査で出土した、中世（十三世紀～十四世紀）の密教法具です。

深山田遺跡は、県北西部、茅ヶ岳西麓端の塩川河岸段丘上、標高約四四五m前後に位置しています。調査では、貿易陶磁器、国産陶磁器、石造物等の遺物から十三世紀前半～十八世紀中頃の宗教関連施設や寺院跡等、さらに、奈良時代及び平安時代の集落跡が確認されています。



深山田遺跡の青銅製鏡は、蛍光X線分析の結果、銅と主成分とし、鉛、錫を含む青銅であることが確認され、その大きさは口径十・七cm、器高三・四cm、底径五・八cmの大型品と、口径七・九cm、器高三・〇cm、底径四・八cm（内一つは破片資料）の小型品があり、いずれも素文の鑄造品で、大小とも底面には、全て「十」字形の線刻がみられます。

このように、県内において遺跡からまともな埋納あるいは保管された状態で中世の密教法具が出土する例は極めて希であり、中世の密教の在り方を調査研究する上で、大変貴重な資料と言えます。

主な行事予定

<p>■シンボル展 国宝 夏・秋・冬山水画 一室町將軍のたからもの 平成19年1月2日～1月28日</p>	<p>■特別展 バルセロナ35年の軌跡 山本正文の世界 平成19年1月20日～2月25日</p>	<p>■常設展第一室 「風林火山」関連展示 平成18年12月5日～平成19年12月末</p>	<p>■新年度干支展 平成19年1月2日～2月4日</p>
<p>■県立博物館 夏・秋・冬山水画 平成19年1月2日～1月28日</p>	<p>■県立美術館 バルセロナ35年の軌跡 平成19年1月20日～2月25日</p>	<p>■県立文学館 「風林火山」関連展示 平成18年12月5日～平成19年12月末</p>	<p>■考古博物館 平成19年1月16日～3月25日</p>
<p>■第4回わたしたちの研究室 優秀作品の表彰と応募作品の展示 平成19年1月20日～2月25日</p>			

表紙を飾る



駿台甲府高校 2年 嶋津桂子
 作品タイトル 「Known」

<作品の紹介>

自分を取り巻くモノを知って、自我が確立されていくイメージを絵にしました。左側のヤギは、教科書に載っていた中島敦の「三月記」という作品の主人公が少し自分と似ているところがあり、その彼の心には虎が棲んでいるという描写があったので、なら私の心にいるのは山羊くらいだろうと思って描き加えました。

指導者 笹本要教諭 岡田昭夫教諭

「声かけ あいさつ」みんなで実践!!

◆教育に関する疑問、質問等がありましたらお気軽に E-mail 又はFAXして下さい。
 アドレス: kyouikusom@pref.yamanashi.lg.jp FAX: 055-223-1744

◆教育やまなしのバックナンバーがインターネットでご覧いただけます。

URL: <http://www.pref.yamanashi.jp/barrier/html/kyouiku/46150769857.html>